

## 5. 良心的実習拒否：教官と学生の役割と責任

### 背景

教育における動物の侵襲的使用や代替法について議論するときには、常に良心的実習拒否の問題を考慮しなければならない。良心的実習拒否とは、戦争の際の良心的兵役拒否のように、個人なり集団なりが自らの倫理的信念に反する行為に参加することを拒否する行動をいう。これは良心の自由に関わる人権問題であり、教育においてはカリキュラム全般に影響を及ぼす。生命科学の授業で、動物の侵襲的使用が代替法に置き換えられておらず、代替法導入の要望が拒否された場合、学生が実習への参加を拒否することが考えられる。良心的な理由で実習を拒否する学生は、動物を殺す解剖実習や動物実験を行うことを拒否するだけでなく、当然、人道的な代替法も要求してくるだろう。

そのため、学生の良心的実習拒否は、従来の慣行や学問の自由について疑問を投げかけ、教官に課題を与えることになる。しかし、それは生命の尊重や傷つけるのではなく治療したいという意欲などの前向きな文化的価値観に根ざしている。さらに、良心的な理由で実習を拒否する学生の多くは、クリティカルシンキング（適切な基準や根拠に基づく、論理的で、偏りのない思考）の能力に優れ、高い倫理感を持っている。そのため、良心的実習拒否は、今ある倫理的葛藤の解決や代替法導入を通しての教育の近代化のために重要な役割を果たすかもしれない。

### 拒否の程度

ひんぱんに拒否を行う学生の数は少ないようだ。学生という立場に伴う社会的・学問的圧力、そして現状を疑問視する者が往々にして受ける心理的・学問的処罰を考えれば、これは理解できるが、このような状況では、実際に実習に対する反発がどの程度あるのか把握できない恐れがある。しかし、動物の侵襲的使用に関わる倫理的問題が自由に議論される状況にあるとき、より多くの学生が実習に対する不快感や反対の声を挙げるという事実が文献にも示されている（参考文献1）。

とはいえ、実習に対する学生の内に秘められた、表に出されない反対は倫理的問題を解決せず、動物の侵襲的扱いを削減することもない。学生は自分の意志に反して実習に参加するかもしれないし、距離を置いて実習を眺めるという選択をするかもしれない。なかには、実習を拒否して自らの信念を守り、貫くのではなく、学部を変える、あるいは学校を辞めるという選択をする者もいるだろう。良心的実習拒否とは、学生が動物の侵襲的使用についてあえて教官に提起し、自分の意見を述べ、代替実習に関する、双方が合意できる解決に向けての道を探るということだ。そのためには、実習に反対する姿勢をより公然と示し、個人あるいは集団として断固として代替法を選択する権利を求めることもあるだろう。このような行動は少数の強い意志を持った学生が起こす場合が多いが、クラス全員が実習を拒否した例もある。

### 教官の反応

このように学生が良心に従って実習を拒否したときの教官の反応は千差万別だ。これは、教官の、課題に創造的に対処する能力あるいは対処しようとする意志、そして変革を行う過程に対する個人として、あるいは組織としての自信を反映していることが多い。考える最良の場合では、教官が既存の代替法を調べ、授業目標を達成できる人道的手法やアプローチを組み合わせた実習を行うという対応をすることもあり得るし、教官自身が代替法を開発する

ことも考えられる。理想としては、そのようなカリキュラムの変更がクラス全体の授業に反映され、学生が全員、代替法の恩恵を受けることが望ましい。そうでなければ、代替法が一般的ではないところでは、「代替法コース」を選んだ学生だけのものになってしまう。

教官は、また、特定の実習の教育目的を満たすような代替法学習を学生自身のやり方でさせることもあるだろう。例えば、獣医学生の場合には、解剖実習や臨床技術訓練のための倫理的な死体を見つける、あるいは、協力的な開業獣医師のもとで課外外科実習をする、といったこともできるし、学校側が、このような活動を単位習得の一部として認めることに同意し、学生の習熟度を評価することもあるだろう。

しかし、なかには冷静で理性的な議論が不可能なほど過剰な反応、感情的な反発を教官、そして時には同級生からも受ける学生もいる。また、良心的実習拒否を、選択する権利を拒否されることへの学生の抵抗や実習への批判としてではなく、もっと個人的な批判であるかのように受け止める教官もいる。学生を攻撃するような質問をしたり、学生の悩みに素っ気ない対応するのは驚くほど一般的である。そして、多くの学生が悪い成績、あるいは単位の不修得、そして時には退学という脅威にさらされるという経験をしてきた。

### 学生の選択肢

実習の拒否を認められないとき、あるいは代替法を自ら準備・計画しなければならない状況を、学校が教育的体験を提供する責任を放棄したと見なしたとき、学生は代替法の幅広い公の実施を求め、それまで以上に熱心に活動することを選ぶかもしれない。学生の選択肢としては、同級生などの学生、趣旨に好意的な教官、学生支援団体、人権団体、良心に従って何事かを拒否する他の人達からの支持を得る、あるいは、大学当局へ提出したものを、よく吟味された実習拒否の主張、そして実習に代わる代替法の詳細およびその教育上の利点と共に公表する、また、最後手段として、マスコミの注目を集めることや、訴訟を起こすことが考えられる。

倫理的な問題に関しては、ほとんどの場合、双方にとってメリットのある解決策を見つけることが可能だ。良心に従って実習を拒否する多くの学生の資質や姿勢について詳しく知ることはそれだけの価値がある。というのは、拒否という行為の建設的な部分を理解することは相互理解を深め、学生と教官間の衝突を削減し、協力して解決への道を探す手助けになるからだ。

### 資質と価値観

実習を拒否するのは活発にクリティカルシンキングを行うタイプの学生が多い。このタイプには科学者の素質があるといえる。物事の正当性を問うことができるのはクリティカルシンキングや科学的思考の表れだ。いかなる革新も科学も、創造的な考え方や既成の規準への疑問なくしては存在しなかつただろう。そして、実習を拒否する学生の多くは成績優秀であり、彼らの持つ知性が、困難に挑もうとする意欲やそのための能力と直接関わりがあることも多い。

実習を拒否し、教官の反感を買ったり、処罰を受けたりする危険を犯すのは軽々しくできることではない。実習を拒否する学生は、教育を重要なものとみなし、高い意欲を持ち、最後までやり遂げようとする意志もある。このような学生が良心的であるのは、ある特定のものに対してだけではない。代替法を用いた最良の実習を目指すだけで

なく、課外トレーニングや学生の科学クラブ、また動物保護活動に参加して、自分の専攻する分野における経験を積もうとしている学生もいるだろう。

また、エモーショナル・リテラシー（自分の感情を理解・対処し、表現する能力）に長け、感受性、敬意、共感、思いやりといったものを大事にする。自分や他人の感情を大切に学生には自己認識があるが、これは本質的に貴重なもので、物事を習得する場合に好ましい影響を与える。というのは、自分自身、そして自分が物事を習得するプロセスに対する認識があれば、より効率良く学ぶことができるからだ。綿密に組まれたカリキュラムに代替法を導入するための学生の取り組みは、学習のプロセスと効果的な学習環境に対するこのような認識に起因するところもある。このような認識を立証する学術研究も発表されており、学生の成績という点においては、代替法は解剖実習と少なくとも同じ効果を持つことを示している（本書、バルコムの章を参照のこと）

これらのクリティカルシンキングの能力とエモーショナル・リテラシーを併せ持つ学生は、倫理的な問題に取り組む意欲がある。倫理リテラシー（倫理的問題を認識し、倫理的な言動に価値を置くこと）は生命科学においてなくてはならないほど重要なものであり、早い時期から倫理の領域について知っておくことは能力や知識として価値あるものとなる。また、エモーショナル・リテラシーや倫理リテラシーを養う過程においてサポートや励ましを受けることは誰にとっても重要だ。良心的実習拒否とは、自身の倫理観に反する実習への参加を拒否し、代替法を求めるという方法で、自身の行動に責任を取るという表現手段でもある。さらに、学生は通常、協力して問題を解決をしようとし、この問題について責任ある態度で教官にアプローチする。このように責任を持ち、真のリーダーシップに必要な資質を育むことは歓迎され、報われるべきである。

#### 倫理的葛藤の解決

実習参加を拒否する学生は、存在はするものの、めったに言及されることのない緊張状態の解決を促す働きをする。動物の侵襲的使用をめぐる緊張状態が指摘され、検討されるとき、それに適切に応じるかどうかは教官次第である。教官は、学生の知的な活力や情熱と向き合うことでこのような課題に対処することができる。しかし、残念なことにこれを避け、権力に訴える、処罰する、あるいは関わらないという手段をとる教官もいる。葛藤を解決することで、学生と教官との関係をも含めた学習環境を大幅に改善することができる。教官が問題に取り組み、代替法を実施しようと努力することに学生は感謝し、自身の思考、学習、倫理に忠実であろうとする姿勢が尊重され、サポートされていると感ずることができる。教育の場において、より敬意を深めたパートナーとして対等な関わりによる改善されたコミュニケーションがあれば、教官の良識と経験も学生に伝わりやすくなる。相互の心からの敬意は成長と学習を妨げるものが何もない非常に自由な環境を形成することができる。そして自身の教育に強い関心を持ち、教官に対して深い敬意を払う学生を指導することは、教官にとってもやりがいのあるものだろう。そのような敬意は学校などが考えるものではなく、まったく別の理由から払われる。

#### 変化をもたらす

動物の侵襲的使用に関する葛藤の解決は、代替法の導入にも結びつく。そのため、学生は一種の触媒として重要な変化をもたらす場合もある。慣れ親しんできた従来の方法を変えるということにおいて、学問の自由に対する教官の認識が制限されているように思える場合には、「学問の自由には常に倫理的制約が伴い、学問の自由を行使しようとする者には社会への説明責任がある」ことを思い出すべきである。文化的価値観の進化と技術的發展の影響が特

徴付ける対話の進展と一般通念の確立は、その制約が何であるかを定義する助けとなる。また、他者の自由を否定するような自由は理屈に合わず、学生の選択の自由や、動物の生存の自由を否定することは倫理的に矛盾している。対照的に、先進的な人道的教育方法を開発するための学問の自由には制約がない。やりたいようにできるということだ。この肯定的な姿勢は、創造の自由に根ざし、動物を侵襲的に扱い、学生の選択を否定するという学問の「自由」の損失と対照をなす。

可能性や機会は進歩的変化を求めるところに集まるものだ。新しい考えや活力をもたらし、現在のやり方を近代化し、人道的なものにするために、学生が教授陣のパートナーとして喜んで迎え入れられることもあるだろう。この問題について議論し、推し進める意欲が学生にあるならば、教官がその一部を誘導することもできるし、新しいソフトウェアなどの代替法ツールの開発の際には、学生は自分のアイデアを提供したり、開発の手伝いをしたり、ベータ（試験）版を試したりすることができる。倫理的に入手された遺体の使用などの代替的取り組みの際には、学生の意欲が基本的なシステムを作る手助けになる。このような変化のプロセスに当事者として責任を共有して参加することで、学生は学習過程に自ら責任を持つようになるだろう。そして、動物の侵襲的使用と代替法は、クリティカルシンキングや倫理リテラシーの技能に磨きをかけるための、すばらしい事例を提供する。

#### エンパワーメント\*

（\*エンパワーメント - 自身の置かれた状況や問題を認識し、生活の調整と改善を図る力をつけ、組織的、社会的構造に影響を与えるようになること）

学生にとって代替法が実施されることは、もちろん、功を奏したということだが、良心的実習拒否に関わるすべてのプロセス自体、啓発的であり能力を引き伸ばすことのできる経験だろう。単純に動物実験が嫌だからにしても、考え抜かれた倫理的な立場からにしても、意見を述べる勇気を出すことによって、能力を引き伸ばすという一連のプロセスが始まり、それによって学生の変化をもたらす作用力もより明白になり強くなるだろう。

学生の持つ強さや資質は、実習を拒否するという行為を通して鍛えられるだろう。しかし、拒否を貫く過程は決して容易なことばかりではない。何かを批判する、あるいは逆に批判されることは、クリティカルシンキングの能力を養い、また、自分の倫理的見解を丹念に評価し、磨くことを余儀なくする。鋭敏な精神を鍛え養い、知的に安易なほうへ行こうとする姿勢を克服することはそれだけの価値がある。倫理リテラシーに磨きをかけ、自らの感情に忠実であることはまた解放的でもある。そして、真摯な姿勢でいることは驚くほど根本的なもので、これに自信があれば、コミュニケーションを非常に効果的にすることができる。より多くを考え、より多くを感じ、自身の進化する倫理観を尊重することで生きている実感や世の中と関わっているという感覚を強めることは、否定し、画一的であり、服従することに代わるものである。後者のような生命を否定するようなあり方は動物の侵襲的使用の継続を可能にし、文化的多様性や進歩的変化に対するひとりひとりの独特な貢献を制限してしまう。

このように、良心的実習拒否はエンパワーメントを促進し、促進されたエンパワーメントにより実習拒否がさらに効果的なものとなる。良く計画された人道的教育と現状に対する現実的な評価、そして自分の能力に対する認識があれば、この問題に精力的に取り組むひとりあるいは複数の学生が、進歩的変化をもたらすことができるのは確実だ。はっきりした戦略や工程をあらかじめ詳細に決めておく必要はない。一番摩擦の少ない方法はおのずと明らかになってくる。特に、今までより現在を大切にし、自身の力を信じるようになるにつれて、そうになっていく。それより

も、楽観的なものの見方やどのような形であれ成功するという信念があれば、展望を具体化する可能性は高まるだろう。

意志を鍛えることは自己啓発において重要な役割を果たし、このため、変化をもたらすということにおいても重要な役割を果たす。強い意志とは、「意志の力」や「がんばりすぎる」という努力、あるいは「厳しい自制義務」ではなく、実際には、自己決定を行う意欲であり、物事を決め、それを最後まで行うことと同じことだ。巧みな意志は意欲を適切な方向に向け、適切かつ容易に使えるようにするだろうし、善意は必要な倫理の基礎となる（参考文献2）。

学生がいったん自分の意志を貫き、変化を起こそうと決意すれば、情報源や支援者は、自然に現れるものだ。気がつけば、まわりに理性的で思いやりのある人々が集まっているかもしれない。また、同僚に公然とは反対しなくても、動物の侵襲的使用に反対であり、カリキュラムの変更を支持する教官が、あきらめたり妥協したりしようとしていない学生に対して深い敬意を感じていることもあるだろう。このような支持の気持ちを表明する、あるいは他の方法で援助することは学生にとって非常に貴重なことだ。

良心的実習拒否とそれに対する教官の反応も含めて、いかなる行動も、より以上の協力と自発的行動の可能性を開くべきものであり、そのようなものを制限したり、否定したりするものであってはならない。責任を持って最後までやり遂げ、できる限り協力するようになれば、この可能性を開くことを確実なものにできる。しかし、良心的実習拒否という「非協力」は、動物の侵襲的使用が必須である場合には、唯一の選択肢だ。とはいえ、学生が倫理的な問題に対して妥協しようとしなくても、教官と協力してやっていける方法は他にいくらかもある。そのような方法を検討し、双方にメリットのある解決を目指す双方次第である。

#### 参考文献

1. 教育における動物の使用に対する見解についての発表された研究の概説としては以下がある。

Balcombe, J. (2000). *The Use of Animal in Higher Education: Problems, Alternatives and Recommendations*. Humane Society Press, Washington, D.C.

また、以下も参照のこと。

Pedersen, H. (2002). *Humane Education: Animal and Alternatives in Laboratory Classes. Aspects, Attitudes and Implications*. Humanimal 4.

2. 「意志」についてのより詳細な研究としては次のものがある。

Ferrucci, P. (1995). *What We May Be: Techniques for Psychological and Spiritual Growth through Psychosynthesis*. Thorsons, London.